

篠原幸雄からやましましたゆきおへ

# マンガと生きた50年

20

依頼された仕事は  
必ず引き受けました



ネット配信版・新つれづれ草に掲載の「マンガと生きた50年」は、東京都江東区・森下文化センターにて2017年10月20日（金）から29日（日）の会期で開催しました。新つれづれ草マンガ展「篠原幸雄からやましたゆきおへ マンガと生きた50年」で展示した展示物を再構成したものです。

**おやしマンガ同人誌**

**つれづれ草**

# マンガ展

篠原幸雄からやましたゆきおへ

## マンガと生きた50年

おやしマンガ同人誌「新つれづれ草」の山下幸雄は1970年少年ジャンプから篠原幸雄としてマンガ家デビューその後、マンガ家、デザイナー、編集者としての立場を変えながらマンガとの関わりを持ち続けて生きてきた。そして今再び、やましたゆきおとしてマンガを描き始めた！

入場：無料



イラスト：篠原幸雄  
(著者少年ジャンプと共同連載「男のつれづれ草」の作者の次男)

**日時：10月20日（金）～10月29日（日）**  
午前9時より午後9時まで（最終日は午後5時まで）

**会場：森下文化センター1F展示ロビー**  
**お問合せ：森下文化センター**  
〒135-0004 東京都江東区森下3-12-17  
TEL03-5600-8666 FAX03-5600-8677  
都営地下鉄新宿線・大江戸線「森下」駅A6出口より徒歩8分  
都営大江戸線・東京メトロ半蔵門線「清澄白河」駅A2出口より徒歩8分  
<http://www.kcf.or.jp/>

主催・新つれづれ草 共催・森下文化センター





# 20、 依頼された仕事は 必ず引き受けました

怖くて断ることは出来なかった

れづれ草」を作りました。

私は劣等感のかたまりでした。

そこに広島から上京してきた新宅さんが加わり、

中学生の時にマンガを描き始めたころは、ただ一人で思いつくまま紙に描き続けました。

彼の文通マンガ仲間が全国から集結して、「肉筆マンガ同人誌つれづれ草」は、雑誌COMで紹介されるレベルの高い同人誌になっていきました。

人見知りでまわりの人たちとコミュニケーションをとる事が苦手だった私は、マンガを描くことで自分の中の思いを自分の外に表現することが出来る事を知り、夢中で一人で描いていました。

たくさんの上手なマンガ仲間の中で、私は常に一番下手な自分の絵に恥ずかしさと劣等感を持つ様になっていきました。

同じクラスにマンガを描く友達が出来、彼の近所のマンガ友達と三人で、肉筆マンガ同人誌「つ

れづれ草」の仲間は、どんな上京して、憧れのマンガ家の先生の弟子やアシスタントになったり、編集部を持ち込んで作品を発表する様になって行きました。

その中でも私は、マンガ家への夢に向かって、ひとりで色々な編集部に原稿を持って行き、自分のマンガを見てもらうために歩き回りました。もちろん採用されることは無く、それでも図版やイラストを依頼され、二つ返事で引き受けて、自宅に帰ってから必死で仕上げ、納品していました。

## ダイナミックプロで得たこと

私は特定のマンガ家先生の弟子やアシスタントになることはありませんでした。

編集者やアシスタントの友人から、〇〇先生がピンチなので一晩来て欲しいと言われて、ヘルプに入ったことはありません。

ただ絵が下手な私のできることは、ベタ塗りやホワイト修正、消しゴム掛けだけでした。

70年安保闘争の時代で、私の通っていたデザイ

ン学校もロックアウトで授業がなくなり、行くところが無くなった時に、少年ブックの編集者から紹介され「永井豪先生のダイナミックプロ」で半年ほど、アルバイトでアシスタントをしたことがありました。ベタ塗りしかできない下っ端でした。

が。  
当時のダイナミックプロには、色々なマンガ家のところでチーフアシスタントをやっていた、スーパーアシスタントの集団でした。

とにかく絵が上手い、早い、そして個性的でした。とにかく絵に関しては、次代のマンガ界を支えるマンガ家予備軍の集まりで、私は圧倒されました。絵だけなら、永井豪先生より上手いと思いました。

この経験の中で私は、私の中ではっきり確認できたことがあります。

それは、いくら絵が上手くてもマンガ家にはなれない、という事です。逆を言えば、絵が下手で

もマンガの本質はその中身で、それをしっかり持っていればマンガ家になれるという事でした。

変な話ですが、ダイナミックプロの皆さんを見ながら、自分はマンガ家になれると確信を持つことが出来たのです。

## 劣等感と不安の中で

ジャンプでマンガ家デビューした後でも、私は「マンガは、テーマ、ストーリー、演出（マンガ特有のコマドリと構成）がしっかりしていれば勝負できる。絵が下手な私でもやっていける」と信じて描き続けました。

集英社でも秋田書店でも、断続的でしたがペーシを頂きながら必死でそれを埋めて行きました。

私はひとりの人間としてこの社会で、マンガを仕事として生きていきたかったのですが、マンガ

の原稿料では、安定的な収入を得ることは出来ませんでした。

締め切りまで時間が無い仕事でも、原稿料が安い仕事でも、今まで経験が無い出来るかどうか分からない仕事でも、全て引き受けました。

ことわったらその後依頼してもらえなくなる、という不安があったのです。

私はマンガでもデザインでも、有名なマンガ家先生の弟子やアシスタントだったわけでは無く、美術大学卒業の様な学歴が有るわけでは無く、技術職の国家試験の資格が有るわけでもありません。独学と言えばカッコイイですが、ただの自称マンガ家、自称デザイナーです。

マンガ家を捨てて、デザイナーで行こうと決めたのは、こんな自分でもこれの方が生きるための収入が得られそつだと、希望が見えたからでした。